

荷風全集

第二十四卷

岩波書店

昭和三十九年九月八日印刷

昭和三十九年九月十二日發行

荷風全集第二十四卷

定價六百圓

著者 永井壯吉

發行者 岩波雄二郎

發行所 株式會社 岩波書店

東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地

目次

斷腸亭日乘第二十九卷(昭和二十年)	三
斷腸亭日乘第二十九卷續(昭和二十年續)	九
斷腸亭日乘卷第三十(昭和二十一年)	二五
斷腸亭日乘第三十一卷(昭和二十二年	二七
至一月初一日)	
斷腸亭日乘第三十一卷(昭和二十二年)	二七
斷腸亭日乘第三十二卷(昭和二十三年)	三三
斷腸亭日乘第三十三卷(昭和二十四年)	三七
斷腸亭日乘第三十三卷(昭和二十四年續)	三〇三
斷腸亭日乘第三十四卷(昭和二十五年)	三三
斷腸亭日乘第三十五卷(昭和二十六年)	三五

斷腸亭日乘第卅六卷(昭和二十七年)	三七五
斷腸亭日乘第卅七卷(昭和二十八年)	四〇五
斷腸亭日乘第卅七卷(昭和二十八年續)	四九六
斷腸亭日乘第卅八卷(昭和二十九年)	四七七
斷腸亭日乘卷卅九(昭和三十年)	四六七
斷腸亭日乘卷第四十(昭和三十一年)	四九五
斷腸亭日乘卷第四十一(昭和三十二年)	五五五
斷腸亭日乘卷四十二(昭和三十三年)	五五三
斷腸亭日乘第四十三卷(昭和三十四年)	五六一
斷腸亭日乘稿	五八九

目 次

斷腸亭日乗(昭和二十一年)	五三
斷腸亭日乗第三十一(昭和二十二年)	四五
後 記	六五

斷腸亭日乘

六

西曆一千九百四十五年

斷腸亭日采

第二十九卷

斷腸亭日記 第二十九卷

昭和二十年乙酉正月起毫

荷風散人年六十七

正月元日。曇りて風なし。華氏四十三度なり。この日誌も今は數重なりて二十九卷とはなりぬ。感慨極りなく却て筆にはし難し。午後杵屋五叟來り夜具衣類を信州知人の家に送たりと款話刻を移して昏暮に去る。此夜空襲なし。

一月二日。晴。無事。洗湯に浴す。

一月三日。晴。晡下種田生青年文士來話。

一月四日。晴。午前種田生再び來り炭一袋蜜柑玉子を饋らる。明夜老母と共に信州に移居すと言へり。夜二更警報。

一月五日。未明警報あり。晴。寒氣甚し。夜初更復警報。

一月六日。晴。午後阿部雪子來話。谷崎君來書。細雪續稿執筆中なりと言ふ。伊藤秀子遠州見付宿立退先より書を寄す。夜警報二回あり。

昭和二十年一月

一月七日 日曜 晴。咄下小堀四郎君來話。

一月八日。晴。無事。寒甚し。臺所のもの皆凍る。

一月九日。晴。午下凌霜子來り海苔干柿を惠まる。二時過警報あり。夜半復び砲聲をきく。凌霜子の談に淺草代地柳光亭の邊。下谷御徒町末廣町東側。竹町西町邊。また淺草仲店も焼けたる由。

一月十日。晴。菅原君來書。深更警報。

一月十一日。陰。昨來寒殊に甚し。晚間細雨やがて雪となるべし。深更警報眠を妨ぐることに例の如し。

一月十二日。思の外雪にもならず西北の風烈しけれど空はよく晴れたり。午後森銑三君來話。山谷の混堂に行く。

裏町や貧しき寺の冬木立

風や坂道いぞく湯（イ）のかへり

一月十三日。晴。福吉町河野古本店にて *Revue des Deux mondes* (イ) 千九百三十七八年の雜誌其他を購ふ。此日無事。夜も警報をきかず。

一月十四日 日曜日 晴又陰。無事。晝の中は掃塵炊飯にいそがし。炭もガスも思ふやうに使ふこと能はざれば板塀の古板蜜柑箱のこはれなどを燃して炭の代りとす。案外に時間を要するなり。朝十一時頃に起出で飯をたきて食し終れば一時過なり。室内の塵を拂ひ町の洗湯に行きかへり來りて

茶など喫すれば日はいつか傾きまた晩飯の仕度すべき頃とはなるなり。されば心のどけく讀書するは晩食の後燈火を點じてより後の事にて毎夜覺えず十二時過となるなり。今年の冬ほど讀書に興を得たること未だ曾て無し。夜初更菅原明朗氏來り話す。

一月十五日。晴。無事。

一月十六日。晴。朝十時警報。午後木戸氏來話。淺草仲店の火事は其中程舊大增料理店となり寫眞屋一軒。また宇治の里料理店のあたりなりと云。又巷説によればマニラの陷落も遠きにはあらざるべく戦争も本年八月頃までには終局となるなるべしと云。T. de Wyzewaの西洋繪畵畧史^{一九九一年板}を讀む。

一月十七日。晴。二三日來寒氣激甚なり。深更警報。

一月十八日。晴。無事。Munteanoのルーマニア文學史を讀む^{一九三八年板}。木炭の配給なきため近隣いづこも取壊家屋の古板を購ひ飯を炊き居れり。

一月十九日。晴。午後警報。

一月二十日。晴。無事。

一月廿一日。日曜日。陰後に晴。宵月の光冴渡るところとなれり。七八日ころの月なるべし。代より大根を買ふ。一本貳圓也。配給米^{五分搗麥入り}一升闇相場十五圓なりと云。

一月廿二日。晴折よくもる。夜半過警報二度。

一月廿三日。晴。後に陰。夜種田生信州立退先より來り干柿玉子馬鈴薯を惠まる。去夏種田生召



集せられ琉球の或島に派遣せられしが銃劍の代りに其形したる木製の棒を與へられしのみ。物資の
 欠乏眞にあはれむ可しと語れり。

一月廿四日。晴又陰。午後山谷町の混堂に行く。小役人らしき四十年輩の男四五人其中の一人帳
 簿を持ち人家の入口に番號をかきし紙片を貼り行くを見たり。靈南坂教會下、石段の雁木坂邊より

崖下北側四五丁人家取拂ふべき事を示すなり。余の行き馴れし混堂も亦取拂ひとなるなり。東京住民の被害は米國の飛行機よりも寧日本軍人内閣の惡政に基くこと大なりといふべし。余が偏奇館もいつ取拂の命令を受くるや知るべからず。

一月廿五日。晴。寒甚し。午後伊藤秀子遠州見附宿立退先より來る。かの地方は一帯に空襲を蒙むること烈しく又米軍上陸の虞なしとせず。人心恟々たる由。どこか安全なる地に轉居したしと其つもりにて上京せしなりと語れり。

一月廿六日。晴。午後岩本齒科醫院に至り治療を請ふ。深夜警報二回。

一月廿七日。陰。後に晴。午後一時比空襲あり。爆音砲聲轟然たり。戸外に出づるに銀座邊かと思はるゝ東南の方に當り黒烟濛々として昇るを見る。三時頃警報解除になりたれば山谷町の洗湯に行く。浴客數人のみ。その語るをきくに、麻布永坂中程より左へ折れし横町に日本の飛行機墜落し人家數軒燒亡。又數寄屋橋より銀座尾張町及有樂町築地あたり燒亡せし由。夕刻余が家二階の水道氷結のため蛇口破裂す。數日來華氏三十七八度の寒さなり。

一月廿八日^{日曜}晴。寒ますゝ甚し。午後洗湯に出でし不在中代々木より比目魚二切。醬油一升^{金拾五圓}を送り來れり。深夜警報三度あり。

一月廿九日。晴。正午種田氏來話。餅を惠まる。この日警報を聞かず。

一月三十日。晴又陰。午後古書商辰巳屋來り一昨廿八日夜の空襲に根津權現のあたりより千駄木

へかけて火災ありしと語れり。寒稍ゆるやかになりぬ。

一月卅一日。晴。午後山谷町の洗湯にて浴客より銀座通被害の詳報をきく。尾張町四辻東側は無事。西側より數寄屋橋山城河岸のあたり爆彈のため一圓破壊又焼亡せり。教文館安田銀行菊正ビル等破壊。服部時計店も内部の破損甚し。築地にては松竹事務所災に罹りしと云。銀座通は新橋より京橋まで通行今以て禁止中なりと云。昏暮代々木より雞肉を送り來れり。

二月初一。雪もよひの空暗し。晡下岩本齒科醫師を訪ふ。

二月初二。昨夜いつの間にか降りし雪今朝は既に歇みゐたり。午後岩本氏を訪ふ。晴れて風はげし。

二月初三。晴天。風歇まず。午後岩本氏を訪ふ。木戸氏使の者に米をもたせ遣はさる。此日また鄰家の媼白米一升を持來り闇相場一升金四拾圓なりと言ふ。晡下混堂に行く。浴客のはなしに去廿七日午後銀座罹災の時水道破壊し地下鐵道洪水となり乗客の溺死せしもの三四百人に及びしと云。二月初四日日曜。晴。寒氣忍び難し。臺所の水晝の中より凍りて解けず。春の來るは今日なるべきにこの寒さにては豆をまくとも鬼は家の内より去らざるべし。この日警報を聞かず。

二月初五。晴。寒ますく烈し。過日根津より團子坂邊の火災に鷗外先生舊邸も烏有になりし由。但しむかしの千朶山房は既に先年焼亡し其後の新築家屋に遺族イナ類氏茉莉子住居せられしなりと云。今日も幸に警報をきかず。

二月初六。晴。數日前辰巳屋見舞に來りし時、何かお望みの物あらばさがして持來るべしと言ふに、今ほしきものにて手に入らぬは砂糖と牛酪なりと答へたり。この日正午のころ辰巳屋古書二三冊と砂糖一貫目とを持ち來れり。砂糖は向嶋の心やすき待合にて得たるもの。其家には火酒日本酒なども隠し持てる様子なり。砂糖は一貫目四百五拾圓なれど當月中には五百圓を越すべしとのことなり。午後混堂に行かむとする時道源寺のほとりにて凌霜子の來るに逢ふ。新富町の事務所空襲にあひし時のなしを聞く。死傷人すくなからぬ由。昏暮阿部雪子來り狀袋二束をおくらる。燃料配給所の男宵闇にまぎれて炭一俵を持來り闇價五拾圓なりと言ふ。余が家の附近去年より炭の配給中絶せるが故なり。夜になりて知る人の家より葱と雞肉とを送り來れり。價を問ふに葱一束金參圓。雞肉一羽金五拾圓なりとぞ。

二月初七。晴。後に陰。朝九時警報。須臾にして解除となる。

二月初八。晏起窓外を見るに雪いつか積りて空は晴れたり。昏暮菅原君より電話。

二月初九。晴。午後警報。忽解除。

二月十日。晴。朝十時警報。午後三時再警報あり。但東京の市街は無事なりしと云。四時過手拭片手に近巷の洗湯にて休まずにゐる處をさがし歩む。初山谷町に行き坂を上り江戸見坂中途より葺手町に下り神谷町及飯倉に至りしがいつこの混堂も本日休業の札をさげたり。空しく家にかへれば日は徐ろに暮れんとす。夕焼の空いかにも春らしくなりしが風猶寒し。食後ドウモンド古雑誌を閲